

聖書：マタイ 7：24～29

説教題：岩の上に家を建てた人

日時：2018年11月18日（朝拝）

山上の説教の最後の部分となりました。このイエス様の説教は、どこを取っても素晴らしく有名なメッセージで、クリスチャンでない人の中にもこの説教を特別に賞賛する人が多くいます。しかし説教はただ聞いて終わりにしてはなりません。それを行わなければならない。そのことをイエス様はこの説教の結びにあたって 13 節から繰り返し語っておられます。今日はその 3 回目そして最後の言葉となります。

ここでイエス様が語っているのは岩の上に家を建てた人と砂の上に家を建てた人のたとえです。どちらも新しい良い家のように見えました。ところが嵐がやって来た時に、この二つの家の決定的な違いが明らかになりました。賢い人の家は強い嵐が打ちつけても倒れず、大丈夫でしたが、愚かな人の家は倒れてしまいました。しかもそれはひどい倒れ方でした。これは何を私たちに教えているのでしょうか。両者の違いを見て行く前に、まず共通点から見て行きたいと思います。二つのことに注目したいと思います。

その一つ目は、外側から見ると二つの家には何も違いがないように見えたということです。片方の家がプレハブ製で、もう片方が鉄筋コンクリート製であったとは書かれていません。また建っている場所にも違いはなかったと思われます。片方の家は高い崖の上にあつて、もう片方は海辺にあつたとは書かれていません。後で見ますように、どちらの家にも同じ洪水が押し寄せました。ですから高低差はなかったと思われます。ルカの福音書の並行箇所を見ると賢い人は「地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を据えた」とあります。そうだとすれば、どちらの家も建てられた場所の表面は砂地であったと言えます。このように外側から見ると、二つの家に違いはありませんでした。これは何を意味しているのでしょうか。それは私たちも人間の目で見ると、誰が賢い人で誰が愚かな人かは分からないということです。私たちはこの二人について片方はクリスチャンで、もう片方はクリスチャンではないと考えるかもしれませんが、そう単純ではありません。この話の前提はどちらも御言葉を聞いた人であるということです。ですから毎週同じように礼拝に出席し、説教を聞いている人たち。ともに賛美歌を歌い、ささげものをささげ、奉仕に加わり、諸集会で同じ聖書箇所を開いている人たち。外からその違いは分からない。しかしその二人の間には決定的な違いがあったということなのです。

もう一つの共通点はどちらの家にも同じ嵐が襲いかかったということです。25 節と 27 節を見比べると分かりますように、どちらの家にも洪水が押し寄せ、風が吹き、その家に打ちつけました。愚かな人の家の方に、よりひどい災害が臨んだとは言われていません。これも私たちに大切な真理を教えてください。すなわち信仰的な人、神に喜ばれる人になれば困難なことは少なくなるかという、そうではない。もしそういう期待を持っていると、何か思わしくないことが起こった時、私たちはひどく動揺することになります。しかし聖書は神は私たちを試すと言っています。私たちの信仰の価値を明らかにし、より強い者とするために神はしばしばテストを与える。ですから私たちは自分の人生に嵐のような出来事が起こった時、そのことで意気消沈すべきではないのです。思い起こすべきは、賢い人にも嵐は襲いかかったということです。

さて、このように晴天の日には全く同じように見えた二つの家ですが、嵐の日になって決定的な違いが現れました。片方の家は大雨と洪水と強風によっても倒れませんでした。もう片方の家は同じ大雨と洪水と強風を受けてひどい倒れ方をしてしまいました。両者の違いはどこにあったのでしょうか。それは先ほど触れなかった部分、すなわち外からは見えない部分が違っていたということです。片方の家は地面の下の岩の上をしっかり基礎づけられていたのに対し、もう片方の家はただ砂の上に乗っているだけのような状態であった。私たちが日々御言葉を行っているかどうかは、ある意味で良く見えないことです。教会に集まってともに御言葉を聞いている時は、あ〜、あの人は私と一緒に御言葉を聞いているということは分かりますが、その人が教会から外に出たところで、そのみことばに従って生活しているかどうかは見えません。そういう普段の見えない生活において御言葉を行う人は「岩の上に家を建てた人」にたとえられています。その人は確かに地面を深く掘る人です。そこには労苦があります。みことばを行うことにおける格闘、努力があります。そのように励んでいる人は嵐の日も大丈夫。一方のみことばを聞いても行なわない人は、地面の下を掘り下げることがをしない、言わば手抜きの人です。表面さえ整っていれば良いという人。見える教会生活さえ、きちんとしていれば良いという人。その人は確かに晴天の日は大丈夫です。賢い人の家と並んでその人の家もしっかり建っています。しかし御言葉を行うという労苦、ある意味で骨の折れる作業をパスしてきた人は、嵐の日にペシャンコになってしまう。その日になって自分は本当に大切なことをして来なかったという現実直面させられるのです。

ではなぜ、みことばを行なうか行なわないかが、このような決定的な違いをもたらすのでしょうか。それはみことばを行なう人は神との生ける関係に生き、神としっかりつながっている一方、みことばを行わない人は神との生ける関係に生きておらず、神とつながって生きていないからではないのでしょうか。このことは行いによる救いと混同しないようにしていただきたいと思います。聖書は決して人間が良い行いをすることによって救いを勝ち取れるとは教えていません。今日の箇所でも主の教えを行う人は、それによって神から合格！と認められて、嵐の中でも守られるという風には述べていません。聖書が一貫して述べていることは、私たちの救いはただ神の恵みによるということです。人間の良い行いによらず、ただキリスト・イエスにある神の恵みにより頼む信仰を通して与えられる。しかし同時に聖書が述べていることは、その神への信仰は行いに現れ出すということです。行いは救いの「原因」ではありませんが、救いの「証拠」となるものです。神との生きた関係にある人は御言葉を行う生活に自分自身を現わすのです。いのちは行いとなって現れるのです。前回「木」と「実」の関係についてのメッセージを見ました。良い木からは良い実が結ばれて来ます。ですから私たちが神と正しい関係で結ばれているなら、そこには良い実が生み出されるはずで、その良い実がみことばを守り行う生活です。ですからこの実がなければ、その信仰は死んでいると言わなくてはなりません。そして死んだ信仰では嵐が襲いかかった時、役に立たないのは当然のことと言えます。

ですからこう言えます。イエス様はここで御言葉を行うことを強調していますが、それはただ人間の力で行なうという意味ではなく、神により頼みながら、神との交わりの中で行なうという意味です。神に祈り、神の力によって取り組むことです。もちろん地上にある限り、私たちの行いは不完全です。一生懸命に神により頼んで行っても色々なところに欠点や罪のしみがあります。しかしそんな者をなお赦し、導いてくださる神の恵みに信頼して、一つ一つ神のみことばを行う道を進んで行く。その中でその人は神の臨在と恵みと力を豊かに味わうのです。そしてそのように日々神とともに歩んでいる人は嵐が襲いかかって来ても慌てない。これまで私が信頼し、私を守り導いてくださった神は、今回も同じように、より頼む私を助け、導いて下さるだろうとの確信に立つことができるのです。そしてその人はその信仰を通して確かに嵐の日をくぐり抜けるように導かれるのです。

一方の御言葉を聞いても行なわない人は、神との交わりに生きていない人です。御言

葉を行うことにおける神との交わりをパスしている人、省略している人です。その人は試練の日にはっきり分かるのです。自分は神との真の関係を持っていないということ。まずその人が感じるのは神に思うように祈れないということ。普段祈っていないと、突然何かの時に神に祈ろうと思っても、祈りの力や慰めが感じられない。ある本に書いてあった恐ろしい警告はこれです。「祈らないことの報いは益々祈れなくなることである」。普段から関係をきちんと作っていない人に、ある時、突然呼びかけて仲良くしようとしても、どうもうまく行かない。どうしてもよそよそしい感覚、取って付けただけのような感覚を拭えない。人間関係でもそうです。ですから神との良い関係は、やはり御言葉に従う生活を通して築く以外にありません。これを手抜きしていると人生で最も助けを必要とする時に、神を近くに感じられない。何かが起こった時には「信仰」が頼りになるだろうと思っていたのに、その信仰が自分の助けにならない。むしろ信仰が自分を見放す。いや信仰が自分を裏切ったのではなく、実は自分が主との真実な関係を築いて来なかっただけです。信仰を持っていると思っていただけで実際は信仰はなかったということが判明するだけです。そうならないようにイエス様は「行なう者となりなさい」と言っているのです。その者に用意されている祝福の中を歩む者となりなさい、と言っているのです。

どうしたら良いでしょうか。具体的には次の3つのプロセスを踏むことが大切だと思います。一つ目は御言葉を聞くということです。今日の箇所は「行なうこと」を強調していますが、そのための基礎はやはりまず聞くことです。礼拝の時だけでなく、日々御言葉に聞く。神との関係を深め、みことばを行う生活に進みたいと思うなら、一週間に一度だけでなく、毎日神の言葉に耳を傾け、聞くことが第一条件です。第二のプロセスは、その御言葉を通して神は私に何を語りかけているのか、祈りの中で良く思い巡らすことです。説教をただ聞くこと、あるいは聖書の字をただ目で追うことと、その御言葉を思い巡らし、自分の生活に具体的に当てはめて考えることとはある意味で全く別次元のことです。聖書は単なる勉強の書物ではありません。聖書を開く時、神はそこにおられて私たちに語りかけておられます。神はこの箇所を通して私に何を語っておられるのか、このみことばは私の生活にどんな変革を迫っているかを祈りながら神に教えていただく。祈りはただ私たちの願いを神に告げる手段ではなく、神が私たちに語って下さるための手段でもあります。そして第三のプロセスが、その御言葉を行なうことです。聖書を正しく読むなら、そこには必ず神の励ましあるいは恵みの約束があります。その神の恵みに信頼して行って行くのです。その時、私たちは神との交わりにおいて新しい局

面に入って行きます。聖書を祈りながら読むことも神と交わることですが、みことばを行なうことは本当に神とともに歩むことです。その神との生きた関係に歩む人はパウロがⅡテモテ1章12節で語った通りに、苦しみの中でも告白することができます。「私は自分が信じてきた方をよく知っており、また、その方は私がお任せしたものを、かの日まで守ることがおできになると確信しているからです。」このパウロのように「私は自分の信じて来た方を良く知っている」と言えるなら、その人は新しい試練を前にしても確信と希望をもって対処することができるのです。

最後 28～29 節は山上の説教を聞いた聴衆の反応です。そこに「群衆はその教えに驚いた。イエスが、彼らの律法学者たちのようにはなく、権威ある者として教えられたからである。」とあります。律法学者たちは様々な書物や先達たちの意見を引用し、それについてコメントしたり解釈したりして話しましたが、イエス様の話は全く違いました。イエス様の言葉は、それ自身権威がありました。聞く周りの人々に強烈な印象を与えずにはいませんでした。どんな学者たちとも違う、深く迫る不思議な力を持っていました。これが示していることは何でしょうか。それはイエス様は私たちと同じただの人間ではないということです。この方は神の御子なるお方。そのことはこの山上の説教の教えにおいてばかりでなく、この後に続くイエス様の生き方や様々なみわざを通して示されて行きます。果たしてその方を前にする私たちは、この方に対してどう応答するのか。それは私たち一人一人に残されている人生で最も重要な問い、永遠のいのちがかかった問いです。

以上の山上の説教、私たちはどう聞くでしょうか。イエス様は父なる神のもとから来られた一人子の御子として、神はどんな方か、また神が私たちを招いてくださっている世界はどんな世界なのか教え示してくださいました。それは私たちにとってはあまりに理想の高い世界、高尚過ぎる世界にも思えます。しかしこれは単なる絵に描いた餅ではありません。これはイエス様を通して神が私たちを生かしてくださる世界です。イエス様の十字架を通して信じる者たちの罪を赦し、聖めて、神が導き入れてくださる世界です。そしてそれは天の御国での生活へとそのままつながって行くものです。私たちはこれを気高い教えとして、ただ鑑賞するだけではなく、実際にここに生きるようにと招かれています。聞くだけでなく、行なうようにとされています。私たちは先に7章7節で「求めなさい。捜しなさい。たたきなさい。」と言われたように、この山上の説教の世界に今ここにある時から生きる者となるために神に祈り求めたいと思います。そのよ

うに取り組み、行う人は、嵐の日が来ても大丈夫。その人こそ岩の上に自分の家を建てたようだと言われる人です。私たちは御言葉を行うことを通して神との生ける関係に生き、神と益々結ばれて、あらゆる試練を乗り越えて信仰の光を輝かせる歩みへ、また私たちにそのための恵みを与え、イエス・キリストにおいて救ってくださる私たちの天の父を証しする歩みへ進んで行きたいと思います。